

平城京右京一条二坊四坪・二条二坊一坪・一条南大路の調査

―第530次

1 はじめに

奈文研本庁舎の建替事業にともない、地下遺構の様相を探るため、学術目的での発掘調査をおこなった(図266)。発掘調査の成果は、現在整理中であるため、ここでは概略を記すのみとし、詳細については、次年度の紀要で報告する予定である。

旧庁舎建物は、奈良県立医科大学付属奈良病院(のち県立奈良病院)として1962年に起工したが、その建設に先立つ発掘調査はおこなわれなかった。そのため、遺構の残存状況を確認するため、2005年度(第400次)と2013年度(第518次)に試掘調査をおこなった。その結果、敷地東北部で西一坊大路西側溝や掘立柱建物など奈良時代の遺構が残ることを確認したもの、それより西や南では、中世の遺物を含む秋篠川の氾濫原が広がる可能性が高いと考えるに至った。

今回の発掘調査では、これら氾濫原の広がり、実は秋篠川旧流路の堆積土であることを確認し、平城京造営時に旧流路が敷葉・敷粗朶工法を用いて埋め立てられたことがあきらかとなった。奈良時代の遺構は削平された部分も多いものの、一条南大路など条坊関連遺構が、想定より深い位置に残存することがわかった。

2 基本層序と検出遺構の概要

調査地は、平城宮の西面中門である佐伯門の西に位置し、佐伯門から西へ延びる一条南大路にかかり、その北の右京一条二坊四坪、南の右京二条二坊一坪にまたがる。水田の地割りなどから、この付近には平城京廃絶後の秋篠川の旧流路があったことが、試掘調査以前から指摘されていた。

調査区の基本層序は、旧庁舎の建設にともなう造成土(最大で厚さ約2m)、旧耕土・床土(20~30cm)、中世の遺物包含層(20~30cm)と続き、その下は場所によって土層が異なる。調査区南部では洪水の堆積とみられる灰色砂(10~20cm)が広がり、調査区西北部でも近世の洪水砂が部分的に厚く堆積する。一方、調査区東北部では、奈良時代の整地土が20cm程度残る部分もある。その下は

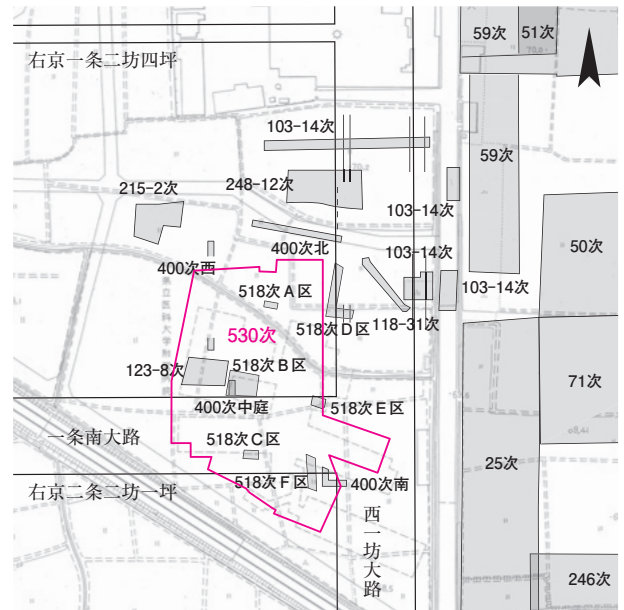


図266 第530次調査区位置図 1:2500

明黄灰色~褐色粘土の地山。遺構はおよそ中世の遺物包含層の下、あるいは灰色砂の下で検出した。遺構検出面は北部で高く、標高68.6m付近(地表下約1.3m)、もっとも低い中央部で標高67.5m付近(地表下約2.5m)である。

検出した主な遺構は、古墳時代から平城京造営直前までの秋篠川旧流路のほか、平城京造営期の遺構として秋篠川旧流路を踏襲しながら改修した斜行大溝がある。奈良時代の遺構として、一条南大路の南北両側溝と、この南北両側溝をつなぐ南北溝、大土坑、井戸5基などを検出した。ただし、第248-12次、第400次北調査などで検出したような顕著な建物跡などはみつからなかった。その他の遺構には、古墳時代以前の溝や、平安時代から近世までの井戸、小穴、中世以降の耕作にともなう細溝、時期不明の掘立柱列などがある。

3 検出遺構

平城京造営前の遺構 調査区の中央を北西から南東に流れる自然流路を検出した。この流路の位置をほぼ踏襲して後述する斜行大溝が造られているため、検出したのは北東岸と南西岸の一部である。幅約30m、検出面からの深さは約3.5mあり、調査区内で西北西から南南東へと屈曲して流れる。北東岸の土層観察によって、幾度となく浸食と堆積を繰り返していることがわかる。流路の埋土からは、古墳時代を中心に弥生時代から8世紀初頭頃までの遺物が多量に出土した。

その他、調査区北方を中心に南北大溝、これに注ぐとみられる東西溝2条、さらにこれらを覆う沼状遺構などを検出した。これらの遺構は、弥生時代から飛鳥時代までのものとみられる。自然地形は、佐伯門のある東側が高く、秋篠川旧流路に向かって下がっていることもわ



図267 調査区東南部敷葉・敷粗朶検出状況（北東から）

かった。

平城京造営期の遺構 平城京造営期には、秋篠川旧流路を踏襲するかたちで、斜行大溝が整備された。幅約15m、深さ約2.5mの直線的な溝で、溝底には薄い水成堆積層が認められる。埋土の中には数層の水成堆積層をはさむものの、最終的には、ある程度乾いた状態で人為的に埋め立てられている。

埋め立てには、敷葉・敷粗朶工法が用いられている（図268）。敷葉・敷粗朶は、大きく3層に分かれており、枝（粗朶）を主体とする上層および下層と、葉を主体とする中層に大別できる。中層と下層の敷葉・敷粗朶の検出面には、幹が直径20～55cmの樹木の切り株が、両岸に沿って多数投棄されていた（図267）。いずれも斧で幹を伐採し、根を切断している。

中・下層の敷葉・敷粗朶をとまなう埋め立て土が、ほぼ斜行大溝の全体にわたっているのに対して、上層の敷葉・敷粗朶とその上に盛り上げられた黑色砂質土は、基本的に後述する一条南大路の路床部分に限られる。この黑色砂質土の上面では、70点近い斎申が集中する遺構を検出した。溝の埋め立て工事の過程でおこなわれた祭祀に関連すると考えられる。

奈良時代の遺構 調査区はやや南寄りで、平城宮の西面中門である佐伯門から西に延びる一条南大路を検出した。斜行大溝を埋め立てた後に造られ、路面は削平されているものの、路床部分が残る。一条南大路の南北では、道路側溝となる東西方向の溝を検出した。両者の心々間距離は70大尺（約25m）で、道路の中軸が発掘調査の成果から想定された佐伯門の中軸線と、ほぼ一致することから、一条南大路の南北両側溝と確認できた（図269）。

一条南大路の北側溝は、約38m分を検出し、調査区外に伸びる。溝には3回の改修が認められ、改修によって位置を変え、溝幅も変化している。南側溝は一部、残存していない部分もあるが、長さ約32m分を検出した。東半では、2時期の変遷を確認したが、西半では1時期の



図268 調査区西部敷葉・敷粗朶検出状況（東から）

堆積を確認した。

さらに一条南大路を横断して、その北側溝と南側溝をつなぐ南北溝が見つかった。埋土の堆積状況から、2時期の変遷を確認した。大路を横断するため、暗渠としていた可能性もある。また、一条南大路北側溝の大路側にあたる南法面には、しがらみによる護岸が施されていた。径8cm前後の杭を約30cm間隔で千鳥に配し、その間に粗朶を編みつける。しがらみは秋篠川旧流路を埋め立てた部分を中心に施されており、主としてこの部分の大路の法面を保護する目的で施工されたと考えられよう。

また、右京一条二坊四坪では、大型の井戸を検出した。井戸の掘方は、深さ約3mに達するが、直径約5.8mの円形を呈する抜取穴によって、大部分が壊されていた。横板組の井戸枠の最下段のみ残存していた。横板は長さ約2.2m、高さ約25cm、厚さ約6cmで、上下の接合は板の側面に互いにホゾ穴を穿ち、別材で作ったホゾを差し込んで横板どうしを井籠状に積む。内法寸法は2.16m。底部には径3～5cmの円礫を約20cmの厚さに敷き詰めており、それを除去したところ、中央には曲物を抜き取ったとみられる穴を検出した。井戸枠の抜取穴からは、木簡や墨書土器、三彩瓦、磚などとともに、奈良時代後半の土器が出土した。

このほか四坪内からは、奈良時代の井戸を4基検出した。坪の南西寄りで検出した井戸枠の抜取穴からは、「左兵下」と記された墨書土器が出土するなど、この坪の性格を示唆する可能性がある資料も出土した。一坪内では、奈良時代の井戸1基や掘立柱列なども検出した。

右京二条二坊一坪の東北隅では、東西約6m、南北約5mの大型土坑を検出した。埋土から奈良時代前半の土器や瓦などとともに、木簡が2点出土した。

また、一坪の南寄り、一条南大路北側溝と接する場所に、均質な暗黒褐色の粘土が堆積していた点も注目される。同様の粘土堆積は、一坪の東北隅にも広がることが確認されており、奈良時代前半の土器が出土することか



図269 一条南大路と南北両側溝（西から）

ら、この時期には、坪内の一部が湿地状を呈していた可能性が高いと考えられる。

その他の遺構 平城京廃絶後の遺構として、一条南大路の路面北縁近くで、円形石組井戸を検出した。石組の内径は約45cmで、底部にはほぼ同じ径の曲物を据えていた。深さは約30cm程度しか残存しないが、11世紀前半の土師器皿が出土し、この時期には一条南大路は当初の規模では機能していなかったことを推測させる。

このほか、この調査では液状化現象による砂脈や噴砂丘などの地震痕跡を数カ所で確認した。層序から、歴史時代には奈良時代以降12～13世紀までと、13世紀以降の少なくとも2回は、液状化現象が発生するほどの地震があったことがわかった。このほか、古墳時代以前にも同程度の地震があったと考えられる痕跡を確認した。

（神野 恵・鈴木智大・小田裕樹）

4 出土遺物

土器・土製品 整理用コンテナ241箱分の土器が出土し、弥生時代から中近世までの土器を含む。土器は秋篠川旧流路の埋土から出土した古墳時代のものが大半を占める。また、条坊関連遺構・京造宮関連遺構・整地土層からは、飛鳥時代末から奈良時代にかけての土器が出土

した。奈良時代の特筆すべき土器としては、墨書土器・陶硯・転用硯がある。なかでも、墨書土器は約60点出土した。主に条坊側溝や右京一条二坊四坪内の遺構からの出土である。判読できたものでは、「左兵下」、「内薬司」、「大伴千嶋」、「□□[忌厨カ]」、「御□」、「老」、「竹田」、「東」、「林」、「供」などがある。

（小田）

瓦磚類 整理用コンテナ267箱の瓦磚類が出土した。大半は奈良時代の瓦である。一条南大路の北側溝からは、丸瓦、平瓦のほか隅木蓋瓦が、南側溝からは、丸瓦、平瓦のほか、第一次大極殿所用の軒平瓦6664Cが出土した。南北溝からも少量の丸瓦、平瓦が出土した。また、井戸からは奈良時代後半の軒瓦とともに、丸瓦、平瓦、三彩平瓦などが出土した。斜行大溝の埋め立て土にも少量の瓦片が含まれていた。

（今井晃樹）

木 簡 木簡は計45点（うち削屑12点）が出土した。その内訳は、右京二条二坊一坪の大土坑から2点、一条南大路北側溝から3点、南北溝から19点（うち削屑11点）、右京一条二坊四坪内の沼状遺構から1点、同坪内の大型の井戸抜取穴から4点（うち削屑1点）、斜行大溝の埋め立て土から16点である。このうち里制下（701～717年）の荷札木簡が、右京二条二坊一坪の大土坑、一条南大路部分の中層敷葉層、一条南大路北側溝、右京一条二坊四

坪内の斜行大溝埋め立て土から出土した。このほか、習書木簡や文書木簡もある。文書木簡には「奈良京」（平城京）とみえるものがあり、「平散（薬物か）」を運ぶ役夫（駄使丁）が逃亡したことが書かれる。「奈良京」という言葉の使用とともに、平城京と藤原京を対比的に用いているとみられることから、平城遷都前後の様子を伝える木簡としても注目される。

（渡辺晃宏）

木器・大型木製品など 約800点の木器と、井戸枠部材などの大型木製品約300点が出土した。南北溝中央付近からは、多量の加工棒、薄板とともに人形1点、斎串3点が出土した。斜行大溝の埋め立て土（黒色砂質土）の上面でみつかった祭祀遺構からは、70点近い斎串や横櫛形木製品1点が折り重なって出土した。斎串は長いもので60cm以上あり、ほとんどが7世紀第Ⅲ四半期には出現するとされる細長い板材の両端を山形に削り出すものである。これらの斎串の中には、一方の端部を山形に作り、もう一方を斜めに切り落とし、その端部付近の側面を半円状に切り欠くという珍しい形状のものもある。また、右京二条二坊一坪の井戸からは、多数の加工棒とともに刀子柄1点や箸2点が、大土坑からは挽物椀1点、曲物1点が出土した。さらに、一条南大路北側溝北の粘土堆積からは、挽物と考えられる高さ4.7cmの黒漆塗の薬壺が1点出土している。

（浦 蓉子）

5 自然科学的分析

本調査では、年輪年代法をはじめとする自然科学的分析を視野に入れたサンプリングをおこなった。これら分析は現在、埋蔵文化財センターを中心に進めており、詳細は来年度の紀要において報告予定である。ここでは、年輪年代測定と酸素同位体比による年代測定の結果について、現時点での概要を記す。

（神野）

右京一条二坊四坪の大型井戸枠部材の年輪年代測定 調査対象表面の接写画像より計測した年輪曲線と、当研究所で蓄積している暦年標準パターン群とのクロスデATINGを行い、西側の井戸枠（234層）についてヒノキの暦年標準パターンE¹⁾と最外年輪が680年で照合した（ $t=7.31$ ）。本試料には、年輪幅を計測できた最外層の外側に1層分の早材が確認できるため、最外年輪は681年ということになる。なお、本試料には辺材が確認できないため、この年代は原木の伐採年代の上限年代として捉

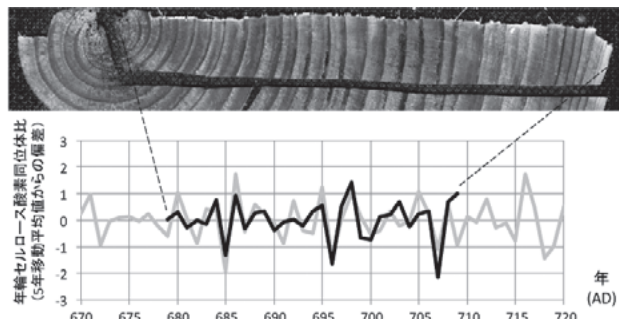


図270 斜行大溝の遺構から出土した切り株の薄板写真（上）とその年輪セルロース酸素同位体比（下）

えられる。

（星野安治）

年輪セルロース酸素同位体比による切り株の年代測定

年輪セルロース酸素同位体比とは、出土した樹木の年輪に含まれるセルロースの酸素同位体比を測定することで、年代測定をおこなう方法である²⁾。酸素同位体比の経年変動パターンは、樹種の違いを越えて高い相同性を示すため、年輪数が50年以下でも、針葉樹・広葉樹を問わず年代決定できる可能性を有する。参考までに、今回の調査で出土した樹齢30年余りの切り株の年輪写真と、その酸素同位体比（黒）を長野県のヒノキなどで作成した標準変動パターン（灰）と対比した図を示す（図270）。

今回、斜行大溝の埋め立て土から出土した樹皮が付いたままの切り株をサンプリングし、分析をおこなった。その結果、現時点までに決定できたモミ属の切り株4点の最外年輪の年代は、それぞれ709年が2個体、701年と697年が1個体ずつとの結果を得ることができた。最外年輪が709年ということは、平城京遷都の直前の709年夏から710年春までの間に伐採されたことを意味する。

今後、さらに多くの資料を測定し、年輪年代の成果や発掘出土品の整理・研究成果と十分に重ねあわせた慎重な議論が必要であるが、現時点のデータからは、発掘調査の成果とあわせて興味深い知見を得ることができたといえる。

（中塚 武／総合地球環境学研究所）

註

- 1) 奈文研『年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—』1990。
- 2) 中塚 武「環境の日本史 ① 日本史と環境—人と自然—」『気候変動と歴史学』2012、吉川弘文館、38-70頁。